

禅の友

Zen no Tomo

6

June 2020

特集 掃除





ご本山だより 大本山永平寺

【鳴鐘めいしょうにのせて】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二



永平寺では鳴らしものと呼ばれる鐘や太鼓などの音によって時を知ることができません。それだけではなく、特定の鳴らしものは広い山内であっても、どこで何が行われているのかわかりません。つまり、永平寺の動きが音として表れているのです。

六月十日は「時の記念日」です。今年には制定されてから一〇〇年の記念の年となります。毎年、永平寺ではこの日の正午に山門前にある大梵鐘が十八声、山内に響きます。修行僧は一声打つ度に「鳴鐘の偈」を唱え、お拝をします。撞いた数を忘れないように足元にある石をずらして次の時を待ちます。この役に当たった修行僧は無心でその時を待つのです。

たった一音、一声の中に鳴らす者の修行の深まりがそのまま現れるといえます。

修行に入った者の生活は、徹底した

簡素さで、必要最小限の所持品しか持ちません。さらに伝統と厳正な規律が仏道の真ん中を歩ませてくれています。そこには自己の思い計らいを挟む余地はなく、自分を忘れ永平寺という大きな有機体と交じり合っている時があるだけです。

四季を通じて大小様々な行持が、日常の修行生活の中に織り込まれています。山内で聞こえてくる様々な鳴らしものには掛値のない「今の永平寺」が現れます。その響きは清らかな山気に乗り、溪の響きとうちとけてどこまでも広がってゆきます。

「さんずはしなん
二塗八難 息苦停酸 法界衆生
もんじょうどろ
聞声悟道」 「鳴鐘の偈」

この鐘の響きには、聞くもの全てが苦しみや迷いの世界から離れてお悟りの道を歩んでほしいという願いが込められています。



ご本山だより

大本山總持寺【たとい難値難遇の事あるとも】

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一

入梅の候となりましたが、新型コロナウイルスの世界的猛威は未だ衰えてないようです。

全国に緊急事態宣言が発令されましたことから、總持寺では募参や法事等以外の来山をご遠慮いただいております。

この稿を認めている四月下旬現在、朝のお勤めは修行僧間の距離を広げマスクを着けて読経しております。また除菌室を設置し外出から戻ったら必ずこの場所に入るようにしています。各寮には消毒液を置き必ず除菌することを義務付けております。

御開山・瑩山禪師さまのお言葉に「たとい難値難遇の事あるとも、必ず和合和睦の思いを生ずべし」とあります。たとえ極めて困難な時代に遭遇し

たとしても、必ず互いに和合し睦み合わねばならない、という意味です。

新型コロナウイルス感染の拡大で、社会全体がギスギスしています。

こんな時こそ瑩山禪師さまのお言葉を思い出し、温かな人間関係を維持していかなければなりません。

心を落ち着かせ静かに坐って、自身を見つめ直したいものです。

本年度の「伝光会摂心」は、期間を短縮し六月八日（月）から十日（水）までとする予定です。講師には駒澤大学前総長の池田魯参老師をお迎えし、『伝光録』の提唱をいただきます。なお、今回は新型コロナウイルスの影響により、山内のみの行持とさせていただきます。

選・坊城俊樹

霾れり天岩戸を閉づるかに

島根県 藤江 堯

評「霾れり」は、黄砂のこと。その広大な砂嵐ははるか大陸から、ひよつとするとモンゴルあたりからやって来る。天照大御神もこれには参っていることだろう。また暗闇の世界にならなければ良いのだが。

春分の犬侍りける祈りかな

北海道 芳賀佳子

評人はもとより、犬までもお彼岸の中日となればご先祖さまに祈りをささげる。ことに今年、過去の大地震や現今のウイルスによる惨事にも捧げる祈りなのではないだろうか。そしてその犬もまた。

◆ せせらぎは春の音符の浄さかな 滋賀県 島崎佳子

◆ 藪椿乙女椿の浮かぶ淵 静岡県 石濱 徹

◆ 涅槃西風とも彼岸西風とも思ひ 大分県 久垣 大輔

◆ 跳び箱を一段上げて春を跳ぶ 大阪府 花谷 広文

◆ 愛憎の引いては満つる春の海 茨城県 鈴木 米征

◆ バスを待つ一会の人とあたたかし 静岡県 小泉 八千代

◆ 日だまりの岩に凸凹亀の鳴く 兵庫県 内藤 昭子

◆ 祖谷翠微の平家の里へ春夕焼 山口県 栗屋 邦夫

◆ 早春の胸のときめき聴診器 岡山県 有元 克英

◆ 銀漢や詩を成すならば独り旅 兵庫県 西田 浩洋

選者吟

亡き父を連れまた同じ花に逢ふ 俊樹

作句小見 我が家の墓は東京の青山墓地にある。その墓のそばにはたくさんのお桜がある。嘗ては父とその桜を見て墓参をしたものだった。私は亡き父とともに今年のお桜を見ている。いずれ私もその墓に入るはずである。

選・長澤ちづ

日照り雨寒のさなかを降りしきる修論発
表孫終える頃か

静岡県 杉原 氏子

評 修論とは修士論文の略で大学院を終える時、提出する論文。作者は家においてお孫さんのその発表の日を案じている。降りしきる雨だが日も差して明るい空だ。きっと上手くいったに違いない。緊張感を湛えつつ場面設定に明るさがある。

途中でも演奏やめるオルゴールさよなら
言へぬ別れもありぬ

岐阜県 後藤 進

評 ぜんまいが切れば音楽が途中でも奏でることを止めるオルゴール。恋の別れか或いは死別か。人と人との別れを、その優しくもはかない音色に重ねて味わい深い。

- ◆ 雪の田にまばゆい光が載るを見て弥生の作業を夫と語りふ
秋田県 小松 紀子
- ◆ 添加物ゼロの表示のむき栗をつくづくと見る百貨売場で
兵庫県 前田 あつ子
- ◆ 枝先のかまさりの卵わが庭に生れくる命今年も待たむ
茨城県 田口 昭子
- ◆ 積む雪に足跡のこし駆けてゆく犬は鎖を吾が手に残し
鳥取県 眞山 博充
- ◆ 境内を小走りにゆく早朝の僧衣の裾にからみつく雪
青森県 中田 瑞穂
- ◆ 新入生の男の子一人に村人ら辻辻に出で祝い見送る
福島県 西木 甚
- ◆ 木漏れ日に木立ちの森の石地蔵凍てつく朝に静寂無言
兵庫県 下浦 正行
- ◆ 黄昏の僅かな紅を含みたる空を斜めに渡り鳥帰る
広島県 小畑 宣之
- ◆ 新型のコロナウイルス根絶に人類の知恵試さるる時
鳥取県 山本 浩一
- ◆ 炭出しに母はちよび髭チャップリン岩テーブルに笑ひし昼食
三重県 西村 廣視

選者詠

浜辺にはコロナ休校の児ら散りて
色とりどりの貝のごとしも

ちづ

作歌小見 新型コロナウイルスの流行が日ごとに危機感をつのらせるなか、山本さんの一首は散文的ですが、シンプルに訴えてくるものがあります。この一大事を前に世界は一つになって、人類の叡智を結集して欲しいと思います。